

経営(継承)のツボ

理念



転期に立つ経営者の資質の鍛え方⑤7

言行一致

早川浩士

有限会社ハヤカワプランニング代表取締役

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に『早川浩士の常在学場』(簡井書房)、『介護人財創造塾』(簡井書房)、『介護保険改正に勝つ!経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

http://www.hayakawa-planning.com
ブログ: http://ameblo.jp/hayakawa-planning/

良知に致る

江戸初期の儒学者で、わが国の陽明学の祖、今なお近江聖人として称えられている中江藤樹が開いた私塾「藤樹書院」に飾られた扁額に記された「致知良」の三文字。

「良知を致す」と唱えたのは、中国・明代の儒学者で、陽明学を興した王陽明である。

「人は身分の上下にかかわらず、誰でも良知という美しい心を持って生まれてきている。聖人でも普通人でも、また、善人でも悪人でも同じである。それぞれが自分の良知の指図に従って行動しなければならぬ」と。

これを「良知に致る」と読み替えたのが藤樹だ。

「人の心の中の良知は鏡のような存在である。多くは醜いさまざまな欲望が起きてきて、つい美しい良知を曇らせる。自らの欲望に打ち勝って、この良知を鏡のように磨き、曇らないようにして、その良知の指図に従うようにしなければならぬ」と。

そのためには、日常生活のなかで「顔つき、言葉づかい、目つき、聴き方、思い」といった具体的な

事柄を挙げ、「和やかな顔つき(貌)をして、思いやりのある言葉づかい(言)をして、澄んだ目で物事を見つめ(視)、相手の本当の気持ち(心)を聞く(聴)ようにして、思いやりのある気持ちを持つ(思)こと」の大切さを「五事貌・言・視・聴・思を正す」として説いた。

五事を正す

ふだんの生活や身の回りの人々との交わりのなかで、自ら五事を正すことが、すなわち良知を磨き、良知に致る大切な道であるというのが、藤樹の教えである。

心を含めてやさしく和やかな顔つきで人と接しましょう
温かく思いやりのある言葉で相手に話しかけましょう
視 心を込めて温かいまなざしで人や物を見るようにしましょう
聴 相手の話(心)を傾けて、よく聞くようにしましょう

思 まごころを込めて相手のことを思いましょう
利用者さんやスタッフとの接し方にも大いに役立つはずだが、「これくらい知っている!」と、うそぶく人もいるだろう。
だが、これを実行しているから

こそ、知っていると見えるのであり、行動の伴わない知識を振りかざしているようでは良くない。「知はこれ行のはじめ、行はこれ知の成るなり」と、陽明学の指針とする「知行合一」の考え方の要が、「伝習録」*に示されている。

この意は、知ることとは行うこととの始まりであり、行うことは知ることの完成なのであると。
職員の人ひとりが「やる気と誇り」を持って働くことができる職場づくりをめざしたいのだが、「その意識にばらつきがある」と、悩むトップも少なくない。

次の問いに心当たりがあれば、ここから着手すべきであろう。
「嘘をつかない!」という自らが、嘘をつくことがある。
「約束を守る!」という自らが、約束を破ることがある。

「利用者を第一に考えよう!」という自らが、自分第一に考えることがあるなどの、「言行不一致」はないだろうか。
「言行一致」は、「知行合一」であるとともに、日常の実践的な課題であると受け止めることのできるトップの下、「やる気と誇り」は育まれるのではなからうか。

*: 王陽明の主張をまとめた語録、書籍集